巻頭言

女性生涯医療がめざすところ

加茂（かも）　登志子（としこ）

東京女子医科大学附属女性生涯健康センターに念願のクリニックが開院したのは2004（平成16）年９月である。以来、患者さんは増加の一途をたどり、現在では月延べ1,600人が受診するようになった。施設の規模は小さいが、メンタルケア科、皮膚科、婦人科、内科、漢方、小児精神、心理相談、ソーシャルワーカー相談、看護、リハビリメイク外来など、さまざまな選択肢を備えた多機能施設である。

婦人科医療が女性に特化した医療であるとすれば、私たちがめざしている医療は一言でいえば、女性という性に配慮した医療である。医療であるので生物学的性差（セクシュアリティ）に配慮するのはもちろんだが、心理・社会的性差（ジェンダー）も十分に、時にはそれ以上に重要視したいと思っている。実は、クリニックの全体構想を練るときに、ＤＶ被害女性が受診しやすい施設というものをまず念頭に置いた。私自身がＤＶ被害女性への精神医学的援助をライフワークとしているため、心理療法や育児相談も是非積極的に取り入れたいと、治療構造のステップアップがまずは大きな目標となった。しかしそれだけではなく、もし彼女たちが気兼ねなく受診できるような施設であれば、どんな女性たちにもおおむね気に入ってもらえるのではないかとの思いもあった。そしてその目論見は今のところ成功しているようである。

「性差」や「加齢」は誰にでも等しくあり、そのためかえってその重要性は気がつかれ難い。が、実は次世代の医療である「オーダーメイド医療」に最も近い重要な概念であると思う。多くの人が手軽に利用できるオーダーメイド医療にどこまで迫れるか。とりあえず、これを「女性生涯医療」と名づけておきたい。

■プロフィール　東京女子医科大学附属女性生涯健康センター教授・所長（2004年4月～）。精神科医。専門は女性精神医学、コンサルテーション・リエゾン精神医学。1983年に東京女子医科大学精神医学教室入局。1987～89年にはドイツ・ハイデルベルク大学精神科に留学。著作に「精神科医のカルテから 体が発するストレス警報を、受けとめていますか」（「婦人公論」2006年11月号）,「女性の不安」（「こころの科学」2006年7月号）など多数。